



WE, JOKERS

英語のジョークを楽しむ会会報

No. 8 June 10, 2008

ジョークの心得三か条：1. ジョークは心のゆとりであり、人生の潤滑油です。
2. ジョークで言語の壁に挑むのは知的快感です。
3. ジョークは簡潔が至上です。

ジョークと私

ホテル・リッツの“FLAT NO”

青木 孝誠



“NO FLAT NO”と言う言葉がある。「ピシヤリとはノーを言わぬ」姿勢を示す。例えば、お目当ての女性に、「今週末、音楽会に行かない？ 招待券が2

枚あるんだけど」と誘った。彼女、運悪く、すでにダイトの約束があった。その際、「駄目！ 先約があるから」と、ピシヤリと断るのが“FLAT NO”。同じ断るにしても、一言、「有難う。でも今回は残念だわ。約束があるから。また次の機会にお願いね！」と言われれば、どんなに可愛いことか。

ホスピタリティで有名な、ホテル・リッツでの取組みの実際はどうであったろうか？

アメリカ人実業家の女性秘書 K 氏は、ボスが到着する前に、必ず自分がチェック・インする。ボスがチェック・アウトする時も、しばらく間をおいてから出発する。彼女は分別のある魅力的な婦人であった。決して気まぐれな要求をするタイアの顧客ではない。

ある時、その彼女がペット用の大きな駕籠にウサギをいれてやって来た。翌日正午頃、客室係から報告があった。ウサギは部屋のなかで放たれ、客室内のすべての家具の脚をガリガリかじっていたのだ。

K 氏が帰館したと知り、若いフロント・クラークはすぐにコンタクトした。彼はなかなか説得力があり、彼女も聴く耳を持っていた。

さらに翌日、件(くだん)の客室係が「ウサギは浴室にシミを付け、汚れが目立ちます」と報告にやって来た。

この一連の出来事に関する詳細を知った経営陣は、今後 K 氏の宿泊は断固として断るように現場に指示した。

翌日、K 氏はチェック・アウトのためにフロントにやって来た。彼女が支払いのためにサインしている際、受付課長のダイビッドは身体をフロントカウンターから乗り出して駕籠の中にいるウサギを金網越しに覗いた。

Then in a calm voice loud enough for Miss K. to hear clearly, he remarked to the animal: “Goodbye, Mister Rabbit, I hope that you enjoyed your first and last stay at the Ritz.” Miss K. showed no sign of having heard anything. Still, she never came back with her rabbit.

K 氏は何事も耳にしたふうもなくチェック・アウトした。その後、彼女が、ウサギを連れて再びホテル・リッツを訪ねることはなかった。

今月のジョーク

“What do you call a rich rabbit?”
“A millionhare.”

第8回研究発表会

HOW TO BE BRITISH

井谷 善恵

日本人は「日本人論」が好きな民族だとよくいわれますが、英国人も自分達のことを皮肉るのが大好きです(アメリカ人、フランス人、ドイツ人のことを皮肉るのはもつと好きですが…)。

●その1: テムズ川沿いにて*

英国紳士がテムズ川沿いで犬を散歩させていました。すると川には今まさに溺れていて必死で“Help!”(助けて!)と叫んでいる男性が…。しかし英国紳士は知らん顔。

そこで、溺れている男性は、“Excuse me, Sir. I'm terribly sorry to bother you, but I wonder if you would mind helping me a moment, as long as it's no trouble, of course.”(ご多忙中のところまことに恐れ入りですが、お願いがございませす。もしお差し支えなければ私を助けていただけませんか? もちろんご事情が許せばぜひどうですか)と言ひ喚えました。

すると紳士は横にあつた救命浮輪を投げて、喜んで溺れている人を助けてあげました。

●その2: What to say before you eat*

イギリスの料理のまずさもジョークの種。フランス人のカッツアルが赤ワインで乾杯している。テーブルにはおいしそうなフランス料理が並んでおり、二人は“Bon appetit!”。ドイツ人のテーブルにはポテトとソーセージがあり、大きなジョッキに入ったビールで“Guten appetit!”。イタリヤ人のテーブルにはキヤンテイワインとパスタがあり“Buon appetito!”。

そして英国人のテーブルには、クチャツツと塩コショウの瓶と各々のお皿には、マッシュポテトの箱とペイクトビーコンズの缶詰が置かれてあり、“Never mind!”(「まあ、こんなものさ!」)。

こんな風にイギリス料理はまずいどわかつていても、英国人はそれに固執し、また世界中のどこへ行ってもイギリス流を通したがりませす。

●その3: “Brits abroad”*

スペインかどこか南のリゾート地の海岸のレストランにいたる英国人の様々な振る舞い…。

メニユーを見ながら、“I can't understand this—it's all in FOREIGN!”(「外国語のメニユーなんか読めないよ!」)。

土地の各物料理にクレームをつける。“What's this?”

We can't eat THIS! Haven't you got any PIE and CHIPS?”(「これなによ! こんなもの食べられない!」パイとチップスはなの?!)

テイクアウェイの紅茶を飲んでいる老夫婦が、若いカッツアルに話しかけている。“I'll tell you one thing—you can't get a decent CUP of TEA in this place! (「まったく、この国では満足な紅茶も飲めんのかね!」)。

それに対して若いカッツアルは、“Too right! I can't wait to get back HOME!”(「まったくですよね、こんなまずい紅茶。早くイギリスに帰りたい!」)。

●その4: Englishmen, Scotsmen, Welshmen and Irishmen

最後はそれぞれのお国ぶり。

Two Englishmen, two Scotsmen, two Welshmen and two Irishmen were stranded on a desert island. It was not long before the two Scotsmen started a Caledonian Club and were playing bagpipes, tossing the caber and eating haggis. The two Irishmen started a Ceilidh and downed a few pints of Guinness. The two Englishmen went to opposite ends of the island and would not speak to each other because they had never been properly introduced.

(Allan Pease, *Rude and Politically Incorrect Jokes*, Robson Books 2001)

(イングリッシュ人とウェールズ人とスコットランド人とイングリッシュ人が二人ずつ無人島に閉じ込められた。スコットランド人はまもなく、仲良くなつてソングスイアを吹きながら丸太投げをしてハギスを食べる。アイルランド人はケルトの歌と踊りを楽しみギネスを飲む。イングリッシュ人はケルトの歌と踊りをしやべるわけにいかず、お互い島の端で黙って黙っている)

イギリス人はなかなか扱いにくい人種ですね。でも非常に愛すべき人種でもあります。

*=Martyn Ford & Peter Legon 著 *The HOW TO BE BRITISH* (Lee Gone Publications, 2003)から

第8回研究発表会

ジョークはモデルで説明できるか

あるトポロジストのチャレンジ

徳永 浩

ジョークの代表的なストーリー展開。読者は、まず1つの解釈を受け止め、突然、第2の解釈も可能であることに気づき、その不調和をおもしろいと感じます。米国のTopologist ジョン・アレン・パウロスが1980年にジョークを初めて図解しました。Topologyは、空間を、点とその相互の関係のみで究明しようとする数学の1分野。

さて、パウロスが引用したジョークです。

A young man registered his requirements at a computer dating service. He wanted someone who enjoyed water sports, liked company, was comfortable in formal attire, and was very short.

The computer sent him a penguin.

青年は、条件に見合うライフスタイルの女性を想定していたのですが、コンピュータは、ペンギンを紹介したのです。Fig.1でジョークは、oから展開しますが、aでは、青年(=読者)は、紹介される相手が「女性」であると思っており、bでも、その解釈を維持しています。cで「ペンギン」とパンチラインを提示されたことにより解釈の突然の切り替えが起こり、dに到ると、それが「ペンギン」であってもおかしくないと認識されます。「女性」と思っていたものが、おもいもよらぬ「ペンギン」を紹介され、不調和に心が揺れます。

しかし、Fig.2のように、作者が「くさび」(曲面の端の影)の先端の左にA点があるように話を展開してしまいますと(話の始めのほうで、ペンギンを示唆)、ジャンプの機会はなく読者は、何の面白みも感じないでしょう。

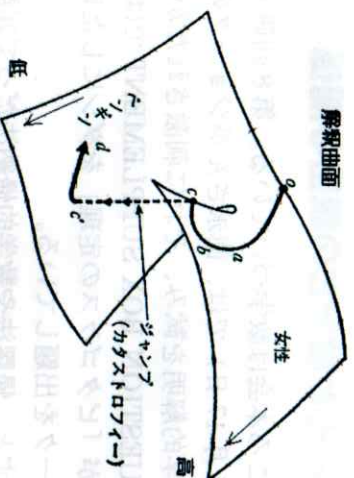


Fig.1

読者の「解釈の強度」分布は図の上方にある曲面になると想定。一方、下の平面は、作者の脳裏にある操作盤。下の平面から発信した「情報」が、上の曲面に達するという仕掛けです。Aという発信をaと解釈、Bをbと解釈というふうにインターリンクしている想定。小文字a、b、c等が高い位置にあるほど読者の解釈の強度は強い。

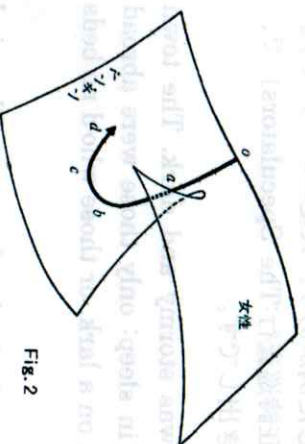


Fig.2

なお、Fig.1でcとc'の距離が大きいほど、笑いのエネルギーは大きい。また、「自己参照型のジョーク」のように2つの解釈がどちらとも定まらない場合は、cとc'の間で、解釈が上下に震動していることとなります。

私のお勧めするジョーク集

相原 悦夫

富山太佳夫(2006)『笑う大英帝国』(岩波新書)

サザタイトルに「文化としてのユーモア」とあるように、18世紀から現代に到るまで王室、政治家、神様までを題材に、痛烈なからかい、目を覆うほどのばかばかしいギャグ、ほろりとさせる優しい笑いの数々を「笑いの文化遺産」として英国文化の本質を読み解く本。(同書カバーより抜粋)随所に表情豊かな写真、図版、漫画などが挿入され、それぞれの時代の雰囲気を感じ取れ、飽きさせない。一方で解説は殆ど日本語で、英語の表現においては限定されるので、その向きには物足りないかも知れませんが、新書で228頁の本としては読み応えのある内容で、大変勉強になり、新たな発見が期待できます。

第4章「大英パロディ帝国」のなかで19世紀半ばに他国に先駆けて国中に鉄道網が敷設され、関連して鉄道株ブームが起きたことを茶化した戯詩があり、それを昭和26年に平井呈一という人が漢詩に翻訳した例があり、大変ユニークです。タイトルは「狂詩巡査行『The Speculators』で、以下はその書き出しです。

The night was stormy and dark. The town was shut up in sleep: only those were abroad who were out on a lark, or those who'd no beds to keep.

I pass'd through the lonely street. The wind did sing and blow: I could hear the policeman's feet clapping to and fro. (tbc)

「三更風雨強真闇(さんこうふうつよくしてしんどのやみ)、町家悉閉戸就寝(ちようかことごとくとをどさしてしんにつく)、唯見徘徊街上者(ただみるがいじょうをはいはいするものは)、獨醉漢無宿者耳(ひとりずつこけとやどなしとのみ)、真夜空街風蕭蕭(しんやのくうがいかせしようしよう)、只聞查公靴村爵(たださくさこうのくつのボクシヤク)、…」
(続きは本を読んでください。)

第9回研究発表会のご案内

- 日時：7月19日(土) 午後2時～4時
- 場所：平河町 Mercury Room
クオリティ株式会社8階会議室
(東京都千代田区平河町1-4-5 平和第一ビル)
- 交通：地下鉄・有楽町線麹町駅1番出口より徒歩2分。詳しくは、
<http://www.quality.co.jp/> をご覧ください。
- 発表者：
濱屋徳郎 会員
「ニューヨーカー誌のカートウソンの説明文から笑いを見つけ、タイム誌等の時事英文を楽しむ」
竹田正明 会員
「私の英語常套句：受けた Joke と受けないジョーク」
- 参加費：会員・非会員とも5000円
- 研究発表会終了後、近くの喫茶店で、交流会を開きます。どうぞご参加ください。

ジョークと数学との親密な関係

このところ本会は数学づいていっている。第8回研究発表会(5月17日)では、徳永さんがジョークの位相幾何学的説明を試み、それに刺激されたか、本号の QUESTION BOX SUPPLEMENT では、新堂さんが「ピタゴラスの定理」をダシにした奇抜なジョークを出題している。

思い返すと、帰謬法や数学的帰納法だって冗談っぽかったし、幾何の証明問題を解きながら、笑い出したくなることもよくあった。(S)

WE, JOKERS 英語のジョークを楽しむ会会報 第8号

発行日：2008年6月10日
発行人：世話人代表 宮本倫好
編集人：佐川光徳
発行所：英語のジョークを楽しむ会
〒102-0093 東京都千代田区平河町1-4-5 平和第一ビル
クオリティ株式会社 気付
TEL:03-5275-6121, FAX:03-5275-6130
e-mail: eigojoker@yahoo.co.jp